

435 HPVのVIRA PAPによる検出と細胞診との比較

琉球大

山城竹信, 東 政弘, 中山道男

〔目的〕STDの一種であるHPVの中に子宮頸癌と関連するものがある。我々は細胞診とVIRA PAPによるHPV-DNAの検出結果を比較検討し, 集団検診による当地方のHPV蔓延の状態を検索しその成績を検討した。〔方法〕対象は1989年6月~8月までの3カ月間で, 子宮癌検診の401例と当科へ紹介されたCondyloma acuminatum 4例, Dysplasia 2例, CIS 2例, Invasive cancer 4例, Herpes 1例の13例について, 従来の細胞診とVIRA PAPで採取した細胞中のDNAをあらかじめ³²PでラベルしたHPVのRNAとhybridizationさせることでHPVのDNAゲノムを直接確認する方法を試みた。〔成績〕集団検診でHPVの陽性率は1.25%(5/401)であった。細胞診class I~IIの症例のHPV陽性率は1.0%(4/399)で, class III以上では50.0%(1/2)であった。HPV陽性で細胞診IIIa以上であったのは20%(1/5)であった。各病変によるHPV陽性率はCondyloma 75%(3/4), mild~moderate dysplasia 50%(1/2), sever dysplasia~CIS 50%(1/2), invasive cancer 75%(3/4), Herpes 0%(0/1)であった。これらの症例でkoilocytosis陽性例はclass II(0/1), class IIIa(3/6), class IV(0/5), class V(0/1)であった。一方HPV-DNA陽性率はclass III a 66.7%(4/6)であり, III b~Vでも66.7%(4/6)であり, III b~Vでも66.7%(4/6)であり, 前者ではkoilocytosisの陽性率とよく一致しているが, 後者では一致しなかった。〔結論〕集団検診でHPV-DNA陽性率は1.25%(5/401)であった。HPV感染はkoilocytosisの出現で診断されるが, HPV感染があっても必ずしも形態学的変化をひきおこさないこともあることが示唆され, VIRA PAP陽性例は細胞診の見直しと, 患者の注意深いfollow upが必要であると考えられる。

436 性器ヒトパピローマウイルス感染の疫学的検討

順天堂大

古堅善亮, 宇津野 博, 鈴木正明, 高田道夫

〔目的〕女性性器のHPV感染はSTDとして最近増加傾向にあるが, 本邦における疫学的研究は十分なされていない。そこで今回, 当院におけるHPV感染の現状について検討した。〔方法〕対象は当院STD外来, 癌検診外来を受診した患者760例である。HPV感染の診断は外陰コンジローマでは視診, 組織診で典型的でHPV DNA陽性のもののみとした。また子宮頸部HPV感染の診断はDNA hybridization(Southern blot法)でHPV DNAが検出されたものとした。使用したDNAプローブはHPV 6, 11, 16, 18, 31, 33, 35型である。〔成績〕1). 328例のSTD患者のうち, 外陰コンジローマの占める割合は16.8%でSTD中, 第3位であり平均年齢は29.6歳であった。2). 患者の職業はOLが最も多く, 次いで主婦が多かった。しかし罹患率でみるとprostituteが30.0%と最も高かった。3). 部位別でみると, 116例中外陰部のみは21.5%, 子宮頸部のみは46.6%, 両方に感染が認められたものは31.9%であり, 子宮頸部感染例の76.6%はハイリスクグループ(16, 18, 31, 33, 35型)であった。4). 子宮頸部よりHPV型が重複して認められた頻度は9.4%であった。5). 妊婦においては非妊婦より外陰, 子宮頸部合併例が多く, 妊娠初期にHPV-DNAが陰性でも後期に陽性となる例もあった。6). 当院における子宮頸癌のHPVの型は16型が45.7%と最も多く, 次いで未知の型が多かった。また発癌年齢はHPV DNAが検出されたものでは, 35歳以下の者が10年前に比較して多い傾向にあった。〔結論〕子宮頸癌の若年化傾向とHPV感染との関連が推測され, 子宮頸部HPV感染のスクリーニング, さらに追跡調査の重要性が示めされた。